

尼子経久

大塚 喜子

文明十六年（一四八四年）出雲守護代尼子経久（二十七歳）は室町幕府から「段銭（租税）横領」の嫌疑をかけられ、富田城を追われた。父清定より家督を相続して七年目の事であった。

従前は出雲の守護は京極氏であったが、清定の頃から国人尼子の勢力は主家を凌ぎ、事実上出雲は尼子が支配するようになっていた。覇気溢れる青年経久の目に最早、京極氏は映らず、将軍家ですら、恐るるに足る存在ではなかった。

古代より奥出雲には純度の高い鉄が豊富に採掘された。「段銭横領」即ち、将軍家に収めるべき鉄の採掘の断銭を納めていない―と嫌疑を受けたのは、若い経久の不遜の心意気の表れに他ならなかった。

幕府は密かに周辺の国人（三沢・水戸・朝山・桜井）に経久追放の密令を発していた。尼子の伸長を苦々しく思つて群雄割拠していた土着の勢力は、将軍家を後ろ盾にして「尼子追放」という共通の利益の前に大同団結した。結果、経久は、いとも簡単に城を追われることとなった。変わつて富田城に三沢の国人塩治掃部助が入った。

経久は、念仏坊主の姿に身をやつし、諸国を流浪して、文明十八年に富田の城下に戻ると、且つて家臣だった山中入道勘兵勝重の庵を訪れた。尼子再興の妙手を考えあぐねた末に二人は、富田城奪還に『鉢屋』を使うことにして、綿密な策を練った。

『鉢屋』とは、古くから出雲において、芸能、製鉄に携わる人々の総称で、富田の城下には「鉢屋・賀麻党」呼ばれる一党がいた。彼らは有力武士や寺社の支配から離れ、自由気ままに漂泊の生活を送っていた。賀麻党の頭目が善弥であった。本来なら一国の権力者守護代に対し、年の若い芸人が口を利くことはなかったが、経久は又四郎と名乗っていた少年期から謡や神楽を好み、善弥と親しく交流して、二人は身分を離れ肝胆相照らす仲だった。

明けて文明十九年の正月元旦

「あら目出度や、弥勒の出世！」まだ夜の明ける前から富田城大手前は万歳を寿ぐ、太鼓、鼓、笛の音に沸き立った。恒例の千秋万歳を舞う鉢屋・加賀党の

一団である。

「やや、今年は元旦早々に賑やかなことよ、それ開門、開門」塩治掃部助以下城兵らが大手門を開けると、烏帽子をかぶり、素袍姿の加賀党七十人ばかりが賑やかに囃したてながら本丸へ練った。正月とて、城内の着飾った女や童達も、見物しようとする丸、三の丸から駆けつけてきた。

その頃、経久と山中勘平らは闇を衝き、音もなく、からめてから、扉をよじ登り、城内に侵入した。と突然

「火事だ！火事だ！」の声に千秋万歳に浮かれ興じていた一同が振り向くと、御殿からモウモウと火の手が上がっている。目の前の鉢屋党が、一瞬のうちに鎧兜姿の兵に替わり、太刀を振りながら此方に向かってくるではないか。慌てて逃げようとした者たちは「ああア・・」更に驚愕の叫びをあげた。鉢屋党は暗れ着の下に甲冑を着こんでいたのだ。城内はたちまち、激しく混乱した。城主、城兵は、思いもよらぬ奇襲に抵抗のすべもなく、城はあっけなく落ちた。

塩治掃部助は経久の眼前で妻子を刺し殺し、自害した。将兵四百人余りは経久の三十名の兵により、全員が首をはねられた。三十歳の経久は、一日で、一年ぶりに富田城奪還に成功した。

天文十年（一五四一）正月、経久は八十歳になった。元旦の富田城下に千秋万歳の笛や太鼓の音はない、宍道や中海から吹く風も只々冷たいだけである。平時で有るなら正装し、談笑しながら登城する家臣らの姿もない。

尼子当主の座に就いた孫の詮久が、三万の兵を率いて毛利討伐に山陽に向かったのは、昨年八月下旬であった。経久はその日以来一日中褥に伏すようになった。毎日、早馬でもたらされる緊迫した戦況は、経久の病を益々重くして、病状は予断を許さないのだ。

詮久が武力による毛利殲滅を熱心に言い出した時、経久は猛反対を唱えた。新興勢力、毛利元就は百戦錬磨の猛将である。毛利は且つて尼子の旗下にあり、経久は人物を熟知していた。力攻めで襲って屈服する男ではない。「元就を味方に引き入れて、腰を据えて、同盟を持ちかける以外にない」それが経久の考えである。

詮久の今回の遠征は毛利討滅だが、尼子の真の敵は大内義隆を倒すことである。そして、最終目標は諸大名を従え上洛し、天下に覇を唱えることだ。詮久は打倒大内の手始めとして、我が尼子から寝返って、大内に就いた憎き毛利元就を攻めるのだと言う。

経久が案ずるのは詮久の若さである。

当年二十七歳の詮久は、経久の長子である正久が若くして戦死したために、幼少より経久の後継者として育った。経久は乱世を生き残るべく、厳しく育てたが、長ずるに従い暴虐無人な我が儘ぶりを発揮するようになった。しかし乱世の男子は温厚な性分よりも、多少荒々しい方が頼もしい……。経久は案じつつも詮久の成長を心強く思っていた。その詮久が尼子当主の座に就くや「我が手で毛利を撃つ」と主張して已まぬ。詮久の主戦論の是非について富田城で一族重臣が連日、話し合いをしたが、体制は勇ましい論の方に引き摺られ、主だった将兵のほとんどが遠征に賛成した。経久は老いの一徹で首を横に振り続けたが、病状は悪化して褥に臥す身となった。頑なに非戦論を唱えた武将がもう一人いた。経久の弟で、詮久からは大叔父にあたる下野守久幸だった。久幸は評定の席で強硬に非戦論を唱え、詮久に思いとどまるよう謹言したが、詮久は「臆病下野！」と叔父を嘲るようになった。

毛利軍八千は、引くかとみれば、攻めかかり、攻めるかとみせて逃げ足早く城門を閉じた。尼子勢を翻弄しつくし、寸分の乱れを見せず、終始水際立った動きをした。対する尼子軍は総勢三万と豪語するものの、実態は夫々微妙に利害が錯綜し、時には味方同士で反目し合うという、至って脆弱なものだった。三万の内訳は、一門衆の他は、土着の国人集団で構成された。五〇年前に（段銭横領）の嫌疑で、尼子が幕府から追放された一件を忘れていない国人は、今は尼子に追従するが、ことあらば、忽ち獅子身中の虫と変ずる面従腹背の輩ばかりであった。

文久十年、三月六日、毛利元就（四十五歳）は郡山城天守の窓から、前方の尼子の本陣に総攻撃の決定を下そうかと煩悶しながら。

「おかしい……妙じゃ。この勝敗は戦う前から明らかである。それを知っているのは経久だ。あれほどの策士経久がなぜこの期に及んでも兵を引かせる判断をしないのだ。病にあらうと、経久なら兵を引かせることは出来る。あの男なら出来る。何としても、経久ならそれをするであらう」

同じ刻、経久は二〇日ぶりに褥から広縁の陽だまりに出て辺りを見廻した。双眸は若い時と変わらない異彩を放つても、肩や腰あたりは頼りない。

「今日は気分がよい善弥を呼べ」経久は広縁に拵えた褥で脇息に身をあずけた。程なく坊主頭に袴姿の善弥が現れ、敷居際に控えた。経久は目で小姓らに退去を命じると、善弥が二間ほどの近さまで歩み、跪いた。経久と善弥の二人だ

けになると、暫くの沈黙の後

瞬きながら

「鵜舟にともす篝火の、消えて闇こそ悲しけれ」息も絶え絶えにかすれ声で謡曲「鵜飼」の冒頭を謡った。善弥は立ちあがると更に続けて

「つたなかりける身の業と、今は先非を悔ゆれども、波間に鵜舟漕ぐ、惜しめど叶わぬ魚の命の物憂さよ」謡う善弥の扇がゆるゆると舞った。

「善弥、そなたにはまことに世話になった。あらためて礼を言うぞ」

「何を仰せられます。突然如何なさいました」経久の瞳に微笑が滲んだ。

「お殿様も随分お若かった」

「そなたとて同じじゃ」二人は齒のない口を晒し、声なく笑い合った。

経久が顔を上げ善弥の目の奥を覗きこみ

「尼子の行く末は抗うことのできぬ天命かもしれない。そのように己を納得させんとした。だが諦めるのはまだ早い。たとえ天明であれ、覆す策は残っている。一つだけ残っておる。死の影の漂う経久の顔に血の気が刺す気配があった。その瞬間、経久は思わぬ行動に出た。両手に抜身の脇差を握ると、病身の身とは思えぬ素早さで渾身の力を籠めて腹に突き刺した。刃は寝衣を、僅かに切り裂いただけだった。経久は既に自裁する力を失っていた。唸り声をあげ、再度突き刺そうとした手を善弥に阻まれ、脇差は部屋の間にとんだ。

「殿、お鎮まりください」

「もうよい、放せ」経久の激情は収まり、やせ細った身体がまた萎んだかに見えた。

「わしは……もはや自ら死することも許されぬ身であるのか、死すら、己の自由にならぬのか」呟きながら手前におかれた鳥籠の中の鶯を握った。善弥らが息をのむ中

ポキッ……骨を裁つ小さな乾いた音が立った。手の中の死骸を投げ捨て、経久は立ち上がった。

「寄るな、寄るでない。経久自害とわが軍に告げよ」足を引きずり、右によるけ、左によるけ凄まじい形相で、褥に戻った。その時使者が、慌ただしく到着した。

「毛利の強襲に味方総崩れ……詮久討死……」その報を経久は目を閉じたまま聞いた。

完